

クリスマスの夜

中高宗教主事 大久保 直樹

⁸その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。⁹すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。¹⁰天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。¹¹今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。¹²あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」¹³すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

¹⁴「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

¹⁵天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。¹⁶そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。¹⁷その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。¹⁸聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。¹⁹しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。²⁰羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。 ルカによる福音書 2章 8節-20節

“クリスマスの夜”この言葉の響きからみなさんはどのようなイメージを抱かれるでしょうか。おいしいご馳走があってその中には、「なんとかタッキーフライドチキン」で既にクリスマスメニューを予約している人もおられるかも知れませんが、うちはケーキを予約した。うちは手作り…等々。そしてそこには家族の笑顔があって。子どもたちが楽しい思いのまま眠りについて、朝目覚めると枕元なのかクリスマスツリーの傍なのか、サンタクロースからのプレゼントがあって…想像するだけでもなんとなくうきうきしてきます。という人もいれば、日常の忙しさから少し離れて、ちょっとロマンティックな、静かで穏やかなひとときを過ごしてみたいという、ひょっとしたら賑やかな子どもたちがいる環境では不可能に近い果たせぬ夢を描きたくなるような人もおられるかも知れませんが、夜ではないのですが、先週の土曜日、この礼拝堂でこども園のクリスマス礼拝を献げました。園児の保護者でもあり、中高教員でもある先生が嬉しそうに伝えてくださいました。故郷イギリスのクリスマスもこんな感じで、こどもたちが笑顔で大きな声で賛美歌を歌って本当に温かい楽しい雰囲気を出したよ、と。

さて、まずはわたしたちが思い描くクリスマスの夜、クリスマスについてお話したので

すが、次に、先ほどお読みいただきましたルカによる福音書の「羊飼いと天使」についてのシーンから、クリスマスの夜を思い浮かべてみましょう。8 節に「その地方で」とあります。直前に主イエスがユダヤのベツレヘムでお生まれになられているので、「その地方」とはユダヤ地方であることが分かります。明後日の中高クリスマス礼拝で恒例となっているページェントでも、もちろん演じられるシーンです。天使たちから主イエスの誕生を告げ知らされるのは「羊飼いたち」です。羊飼いについてはいろいろと説明されることがあります。私自身、当時の社会では階層的には底辺にあって、社会からも疎外されるような生活を送っていたということをお話してきたこともありますが、決して卑しい職業とまでとらえる必要はないようです。ただ、牧畜生活ですから当然、牧草と井戸水を確保し、野獣や盗人から群れを守る昼夜を分かたぬ見張りも必要です。暑さや寒さから羊を守る心労も並大抵のものではないでしょう。居住地が安定しない苦勞の多い生活であることは想像に難くありません。そんな彼らに天使が近づいて言ったのです(10-12 節)。「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる／今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである／あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」「恐れるな」って言われても恐れますよ。夜通し羊の番をしていた、ということは真っ暗な空に満天の星空だったのか、雲の広がる、星が見えにくい夜空だったのか、いずれにせよ先ほど申し上げた厳しい牧畜生活の只中であって、いきなり天使が現れて「恐れるな」と言ったかと思うと、続く言葉はあろうことか、「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」です。もう頭の中は「?」「?」「?」だと思えます。一介の羊飼いに、「民全体に与えられる大きな喜び」について告げられているのです。それ以前にまず『なんでここに天使???』から始まって『なんで民全体のことを羊飼いであるわたしたちに???』。あまりの驚きに、尋ね返す余裕もないまま、天使は一気に言い放つんです、「大きな喜び」の内容を。それが、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。／あなたがたは布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」ダビデの子孫からメシア救い主が生れるということは旧約時代からの預言の実現として羊飼いたちにも聞き及ぶところであったかどうかは分かりません。ましてやお告げの後半に至っては常識で考えるならば理解できるものではありません。あのイスラエル統一王国時代の王ダビデの子孫であるメシア救い主がなぜ、飼葉桶の中で寝ている乳飲み子なのか。ここも「?」「?」「?」なのですが、そのことも尋ね返す暇もなく、今度は天の大群が加わって大合唱です。14 節「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」羊飼いたちとしては、驚き惑いつつも、訳が分からないまま、それでも『きっと喜びのお告げであることは間違いないんだろうな』というように、疑う間もなく確信できて、『もう行くしかない』、『行きたい』、『会いに行きたい、救い主に!』そんな心に変えられたのではないのでしょうか。羊飼いとして生まれ、羊飼いとして生き、羊飼いと

して人生を終えていく自分たちに、これまで味わったこともない高揚感、希望という感覚が湧きあがり、羊飼いたちは話し合ったのです。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか。」(15 節) 急いで行って、マリアとヨセフ、そして飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子イエスを探し当てた彼らは人々に告げ知らせるのです。聞いた人々は不思議に思います。『一体何を言っているんだ?』当然の反応です。しかし羊飼いたちは、実際に天使のお告げの出来事を見聞きできたことで、神をあがめ、賛美するのです(20 節)。ここで、羊飼いたちから話を聞いた人々とも、その人々に告げ知らせた羊飼いたちとも異なる反応を示している一人の人物がいます。マリアです。19 節。「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」 思い返せば、天使ガブリエルから、いきなり「おめでとう」と言われ、「恐れることはない」と言われたことから始まり、救い主となる男の子を産む、しかもイエスと名付けなさいとまで告げられ、「どうしてそのようなことがありえましょうか」とにわかには信じられないことを正直に言ったマリアが、その場の天使との少しの会話で「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」(1 章 38 節)と言ったものの、その後やはり天使から子どもを産むということを告げ知らされていた祭司ザカリアの妻であるエリサベトの元を尋ねたマリアは、その事実を確かめたかたに違いありません。実際に会ってみてその事実を確認し、不安も消えて、神さまを賛美するまでにはなりました。それが「マリアの賛歌」と呼ばれるものです。「マニフィカト」というラテン語の曲名で多くの音楽家によって作曲されていることもでも良く知られています。やがてエリサベトがヨハネを産み、自らも、救い主である主イエスを身籠り産むことができた、そして天使からの知らせの出来事は、自分だけではなく、羊飼いたちにも起きたことに、マリアは、ここで一体何を思い巡らしたのでしょうか。『この子を産んだ自分が救い主の母としてどのように生きていくことになるのだろうか…。』一旦は受け入れたものの、産んでみるとまた新たな不安が沸き起こってきたのでしょうか。『この子は一体どのような大変な人生を歩むことになるのだろうか…。』と自分のことよりも主イエスの行く末を案じているのでしょうか。どうか無事であってほしいという母の切なる祈りでしょうか。多くの思いがよぎり、不安を抱えつつも祈り委ねようとするマリアを想像することができます。

ここでまたわたしたちが生きる時代のクリスマスの夜について想いを馳せたいと思います。2023 年のクリスマスの夜。ここにいるわたしたちはどのようなクリスマスを過ごそうかと期待をすること、想像することができます。しかしここにはないわたしたちの中には、クリスマスの夜、いいえ、今日の夜でさえ、生きることができているかどうか期待するどころか、希望が薄れ、失望し、絶望している方々がたくさんおられるということをも、特にこの 2023 年のクリスマスでは心に想わねばならないと思うのです。イスラエル・パレスチナだけではもちろんありません。けれどもこのクリスマスに特に想うのはユダヤ教・キリスト教・イスラム教の聖地が戦地になっているとも言える状況であること、一日も早く平安な聖地に戻ることを祈るばかりです。痛みを知っているはずの人々が、痛みを

痛みでやり返している、という言い方は乱暴かもしれません。言い直すとすれば、両者、両国に本当の痛みを知っている人は、罪もない多くのこどもたち、女性、お年寄り、一般市民の人々。しかし実際に武器をもってやり返しているのは痛みを知らないあるいは知っていながらにして無視をしながら国の統治をしているつむりの為政者たちです。痛み・苦しみ・悲しみ・失望・絶望の中にある人たち、どうかそのような方々が希望を持つことができますように、そして一日も早く平安が訪れますように、そのためにわたしたちにできること、すべきことをなさしめてください。今こそわたしたちもあのマリアのように不安を抱えながら、様々な思いを抱えながらも、思いを巡らせ、祈るときです、祈りを合わせるときだと思います。そしてその祈りとは他のなにものでもない、「主の祈り」です。聖書科教諭を 30 年務めて来て、聖書の授業で最近ほど、授業時に主の祈りの尊さと必要性を生徒たちと共有していることはないかも知れません。先日宮城学院中高保護者対象の小さな集まり「聖書に親しむ会」でも同様に主の祈りを共に声に出して分かち合いました。また宮城学院では毎朝の教員の打合せは主の祈りから始まります。戦争のニュースが今ほどまでに流れることのないときには、毎朝の主の祈りは routine 日課、duty 義務とも言えるものです。その duty とはともすれば、マイナスの響きに聞こえてしまいます。つまり宮城学院の教員や生徒であればしなければならないもの。でも今まさにプラスの意味で、わたしたちに積極的に祈ることが求められる duty 義務だと思うのです。主の祈りとは、主イエスが弟子たちから「祈るときはどのように祈ればよいのですか？」と問われて、このように祈りなさいと教えられた祈りの模範です。みなさんとぜひ一緒にこの主の祈りを祈りたいと思うのです。主イエスは、わたしたちにこの祈りが 1 人の祈りではないこと、「われら」の祈りであると教えてくださっています。「われら」とは身近なつながりにある「われら」であり、国の内外を問わず、この世に命与えられている今を生きる「われら」です。主の祈りは、冒頭の「天にまします…」という神への呼びかけの言葉に始まり、「国と力と栄とは…」から「アーメン」までの結びの言葉で閉じられますが、その間に 6 つの祈りが込められています。どうかその一つひとつの祈りの意味をかみしめながら、特に「われら」を想いながら、ご一緒にお祈りいただければ幸いです。

それでは主イエスがわたしたちにこのように祈りなさいとおっしゃってくださっている祈りを祈ります。「主の祈り」…。

祈ります。

すべてのものの創りぬし、わたしたちの救い主イエス・キリストの父なる神様。今日このとき、あなたによって建てられました宮城学院に連なるわたしたちは、尊い御子イエス・キリストのご降誕を感謝しお祝いする礼拝をこのように献げることができていますことを心より感謝いたします。そして今日もこの与えられている命をありがとうございます。この命をわたしたちが繋がる人たちとの間で平和に生きる命としてあなたが用いてください。今尚、様々なことで悩み苦しむ、悲しみ、怒り、痛みを抱えるひとたちがいることを

憶えて祈ることができるわたしたち、共にいることができるわたしたち、声をかけ、手を差し伸べるることができるわたしたちとしてください。キリストによる新たな1年もまた、イエスキリストのみ言葉とみわざにならって生きることができるわたしたちでありますように。この祈り、わたしたちの救い主、イエスキリストによって御前にお献げいたします。アーメン。

(2023年12月19日)